

# Chaucer の言及している動植物名

池 田 広 昭<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 一般科

## The Names and Frequencies of Plants and Animals Mentioned by G. Chaucer

Hiroaki IKEDA<sup>1</sup>

### Abstract

The purpose of this paper is to list all the names of plants and animals mentioned by Geoffrey Chaucer according to their frequencies. The species of Chaucer's plants and animals and their relative frequencies have very much in common with those of Shakespeare and English nursery rhymes.

### 1. 序

英国の伝承童謡と Shakespeare の作品に登場する動植物を見ると、その種類、種類別の頻度、登場の仕方などに全般的な共通性がみとめられる。それは日本人の目から見て「英国的」と映る特徴である。<sup>1)</sup>「英詩の父」と言われ、英文学の源として位置づけられる Chaucer の作品においても同様の傾向が見られるであろうか。本稿は Chaucer の全作品に対する机上の動植物採集を行い、このことを検証しようとするものである。ただし本稿は個々の動植物名の生物学的に厳密な同定を意図するものではない。

資料としては Tatlock と Kennedy の *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose*<sup>2)</sup> を用い、この見出しに最初から目を通し、動植物名とみなされるものをすべて使用回数と共に拾い出し整理した。判断に迷ったときの手引きとして Davis 他 の *A Chaucer Glossary*<sup>3)</sup> と Denson の *The Riverside Chaucer*<sup>4)</sup> をしばしば参照した。また *Concordance* の見出しに立ててない動植物名も一部に存在する可能性があるので *Glossary* に順に目を通すことによって極力これを補った。

動植物名を扱うときには常に定義の問題が存在するが、本稿では広く解釈するのを基本方針としている。この点に関して特に注意すべき事柄としては、動植物として名詞形だけでなく他の品詞の派生語も採っているということがある。したがって、たとえば形容詞の *rosy*、動詞の *dogged* などがそれぞれ *rose*、*dog* の内に数えられている。

派生語を採る際にもどこまで採るかという問題があるが、これについては適宜判断した。ただし名詞以外の品詞の派生語で採用されているものは少数である。複合語中の動植物名、たとえば *gingerbread* や *weathercock* の *ginger* と *cock* などは積極的に採って、その動植物名のところにまとめてある。神話や伝説に現れる架空の動植物、たとえば *dragon*、*cerberus*、*mermaid*(例は動物のみ)なども採用している。

以下に動植物名を示すにあたって綴り字の扱いについて記しておかなければならない。本稿は Tatlock らの *Concordance* に拠っている関係上おのずとこの語彙索引の綴り字を採用することになる。Tatlock らの索引は、現代英語に対応する語(ということは歴史的にみて同じ語だということである)が存在する場合は現代英語の綴り字を見出しに立て、存在しない場合は中期英語的綴り字(「的」というのは、彼らの綴り方が必ずしも中期英語の綴りそのままではないからである)を立てるという基本方針に従っている。中期英語の頃は書記法が確立していなかったから、もしそうしていなければ、見出しが煩雑になったに違いない。同一語と認められるものが複数の別の見出しに立つことにもなっていただろう。また写本による綴り方の違いも考慮しなければならなかっただろう。この点から Tatlock らの判断は実用的で妥当なものだったと言ってよいだろう。本稿はこの Tatlock らの原則に従っている。ただし独自の判断で若干変更した綴りが少しある。また Tatlock らの見出しにない語も少し採っているが、そのときにはできるだけ彼らの原則に従うようにした。

## 2. Chaucer の言及している植物

以下に Chaucer が作品中で言及している植物を頻度数順に示す。<sup>5)</sup> 同一頻度に複数の植物が該当する場合はアルファベット順とする。植物名の前の S はその植物名を Shakespeare も言及しているということを示す。同様に M は英国の伝承童謡、Mother Goose<sup>6)</sup> に言及があることを示す。植物名には簡単に和訳あるいは説明を加えたが、これは前節で述べたように生物学的に厳密な同定を意図するものではない。同じ植物を別の名で呼んでいるときは、語形がかけ離れていれば、別の見出しを立てている。複数形と所有格形は原則として単数形のもとにまとめてある。

128 回	SM rose	バラ
42	SM corn	穀物、特に wheat
25	SM grass	イネ科の野草
19	S laurel	ゲッケイジュ
18	SM oak	オーク
16	SM lily	ユリ
14	SM daisy	デイズ
12	SM thorn	イバラ
11	SM bean	豆、ソラマメ類
10	SM apple	リンゴ
	S leek	リーキ、ニラネギ
	SM wheat	コムギ
9	S vine	ブドウ(の木)
8	SM briar	イバラ、野バラ
6	S asp(en)	(ヨーロッパ)ヤマナラシ
5	S box	ツゲ
	S grape	ブドウ(の実)
	haw	hawthorn の実
	licorice	カンゾウ
	SM nut	堅果、木の实
	S pine	マツ
4	SM ash(en)	(セイヨウ)トネリコ
	S balm	セイヨウヤマハッカ
	beech	ブナ
	SM berry	液果、漿果
	SM hazel	(セイヨウ)ハシバミ
	S olive	オリーブ
	S palm	ヤシ
	SM pear	セイヨウナシ
3	SM acorn	ドングリ
	SM barley	オオムギ
	cetewale, setewale	setwall のこと。ヨウ シュカノコソウ、ガジュツ
	S cypress	イトスギ
	S elm	(ヨーロッパ)ニレ
	S fern	シダ

	SM fig	イチジク
	(S) lind	リンデン
	SM malt	麦芽
	S mast	ブタの食べるドングリ
	SM nettle	イラクサ
	pirie	pear tree のこと
	tare	カラスノエンドウ(の一種)
	tow	flax のこと
	SM violet	スマイレ
	S wort	アブラナ類
	S yew	イチイ
2	SM broom	エニシダ
	S burnet	ワレモコウ
	canel	cinnamon のこと
	S cedar	ヒマラヤスギ
	(S)(M) chestein	chestnut のこと
	citrus	柑橘類
	clove-gillyflower	clove( チョウジ )のこと と思われる
	M fir	モミ
	SM ginger	ショウガ
	S gourd	ウリ、ヒョウタン
	SM hawthorn	サンザシ
	holm	トキワガシ
	SM ivy	キツタ
	maple	カエデ
	SM nutmeg	ナツメグ
	SM oat(s)	カラスムギ
	periwinkle	ツルニチニチソウ
	S plane	プラタナス、スズカケノキ
	poplar	ポプラ
	(S)(M) reed	アシ、ヨシ
	SM rush	イグサ
	sloe	リンボク類 black hawthorn の 実
	SM thistle	アザミ
	SM woodbine	スイカズラ
	1 agrimony	キンミズヒキ
	alder	ハンノキ
	aley	service-berry ナナカマドの実
	(S) almander	almond のこと
	S aloe(s)	アロエ
	SM barm	酵母
	bedstraw	ヤエムグラ類
	S birch	カンバ
	S blackberry	ブラックベリー
	bola	bullace セイヨウスモモ
	SM bramble	blackberry 類の木苺
	brasile	ブラジルスオウ、赤い染料
	caleweis	pear の一種
	catapuce	caper-spurge トウダイグサ
	centaury	シマセンブリ

SM	cherry	サクランボ
M	cinnamon	シナモン
	clote	burdock ゴボウ
S	cockle	ムギセンノウ
	coine	quince マルメロ
	cress	カラシナ
	cummin	ヒメウイキョウ
S	date	ナツメヤシ
SM	dock	ギシギシ、スイバ
S	(eglantine)	エグランタイン、人名としての用法
S	fennel	ウイキョウ
S	flax	アマ
S	flour-de-lys	イチハツ
S	fumitory	カラクサケマン
	gaitry	buckthorn クロウメモドキあるいは honeysuckle スイカズラのことか
	galingale	コウリョウキョウ(バンコウソウ)の根茎
S	garlic	ニンニク
(S)(M)	gold	marigold のこと
	gum	ゴム
S	heath(er)	ヒース
	hellebore	ヘリボー
SM	hemp	アサ、タイマ
	herbe yve	buck's-horn plantain オオバコ の一種か
S	hip	バラの実
	lauriol	spurge laurel ジンチョウゲの一種
	lunary	ギンセンソウ
	madder	セイヨウアカネ
S	medlar	セイヨウカリン
(S)(M)	mint	ミント、ハッカ
	myrrh	没薬
(S)	olmer	elm のこと
SM	onion	タマネギ
	open-er	medlar のこと
	paritorie	pellitory ピレトリウム
SM	parsley	パセリ
SM	peach	モモ
SM	pepper	コショウ
SM	pese	peas エンドウ
S	plantain	オオバコ
SM	plum	セイヨウスモモ
S	pomegranate	ザクロ
(S)(M)	primerole	primrose サクラソウ
S	raisin	干ブドウ
SM	rye	ライムギ
S	saffron	サフラン
	sallow	osier サルヤナギ

S	sycamore	エジプトイチジク
	true-love	herb Paris ツクバネソウの一種
	valerian	カノコソウ
S	vetch	カラスノエンドウ
SM	walnut	クルミ
	welde	ホザキモクセイソウ
	whippeltree	cornel-tree ミズキか
S	willow	ヤナギ
	woad	ホンバタイセイ

以上 Chaucer の言及している植物の

異なる名の総数 140

延べ言及回数 569

### 3. Chaucer の言及している動物

動物も植物と同様の方法で示すが、動物についてはあらかじめ哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類・貝類、昆虫、架空動物、その他の8つに分類したうえで示すことにする。

#### 3.1. 哺乳類

88回	SM	horse	ウマ
55	SM	lion	ライオン
38	SM	hound	猟犬
31	S	catel	cattle ウシ、畜牛、家畜
27	SM	boar	去勢してない雄ブタ、イノシシ
25	S	steed	乗用馬、軍馬
24	S	wolf	オオカミ
23	SM	bull	去勢してない雄ウシ
	SM	fox	キツネ
22	SM	hart	雄ジカ、特に5歳以上の red deer についていう
19	SM	sheep	ヒツジ
18	SM	ape	類人猿
	SM	lamb	子ヒツジ
16	SM	bear	クマ
14	S	courser	駿馬、軍馬
13	SM	ass	ロバ
	SM	mouse	ハツカネズミ
	SM	ox	ウシ、特に去勢した雄ウシ
10	SM	cat	ネコ
	SM	swine	ブタ
9	SM	dog	イヌ
	SM	hare	ノウサギ、ヘア
	SM	tiger	トラ
8	SM	deer	シカ
7	S	whelp	子イヌ、クマやライオンの子
6		caple, capul	horse のこと
	SM	mare	雌ウマ

5	SM colt	雄の子ウマ
	S palfrey	乗用馬
	SM ram	雄ヒツジ
	S roe	ノロ
4	SM buck	雄ジカ
	SM calf	子ウシ
	S wether	去勢した雄ヒツジ
3	S cony	(アナ)ウサギ
	SM cow	雌ウシ
	SM goat	ヤギ
	S hackney	貸ウマ
	S hind	3歳以上の red deer の雌ジカ
	S leopard	ヒョウ
	SM pig	(子)ブタ
	SM rat	クマネズミ、ネズミ
	S squirrel	リス
2	SM doe	雌ジカ
	S fawn	子ジカ、特に1歳以下のもの
	SM hog	(去勢した雄)ブタ
	kid	子ヤギ
	limere	猟犬
	S neat	(角のある)家畜、畜牛
	stot	horse のこと
	SM weasel	イタチ
1	alaunt	wolfhound 大型の猟犬
	ambler	amble(側対歩) をしているウマ
	(S) babewyn	baboon ヒヒ
	beaver	ビーバー
	S camel	ラクダ
	colfox	黒いキツネ
	colle	コリー
	SM cur	野良犬、野犬
	dextrer	steed, courser のこと
	SM dun	河原毛または月毛のウマ
	SM elephant	ゾウ
	S gelding	去勢したウマ
	S gib	雄ネコ
	SM greyhound	グレイハウンド
	S hyena	ハイエナ
	S jade	痩せ馬、癖の悪い馬
	S kine	cow のこと
	lynx	オオヤマネコ
	S polecat	ケナガイタチ
	(S) raa	roe のこと
	relay	猟の換え犬
	rouncy	ウマのことだが、詳しくは不明
	S sour	4歳の雄ジカ
	SM spaniel	スパニエル
	S steer	雄の子ウシ
	M talbot	タルボット

S urchin	(ヨーロッパ)ハリネズミ
vache	cow のこと
SM whale	クジラ

以上 Chaucer が言及している哺乳類の  
異なる名の総数 80  
延べ言及回数 658

### 3.2. 鳥類

23回	SM cock	オンドリ、一般に鳥の雄
22	SM eagle	ワシ
21	S chanticleer	オンドリ (の擬人化)
18	S falcon	(鷹狩りの) タカ、ハヤブサ、とくに雌
	SM hawk	タカ、小型のワシタカ亜目の鳥
16	SM crow	カラス
15	S nightingale	ナイチンゲール、小夜鳴鳥
14	SM goose	ガン、ガチョウ
11	SM hen	メンドリ、一般に鳥の雌
10	SM dove	ハト
	tercelet	雄の falcon
9	SM lark	ヒバリ
	(S)M pie	magpie カササギ
8	SM cuckoo	カッコウ
	SM owl	フクロウ、ミミズク
	SM turtle	turtle-dove コキジバト
7	formel	鳥の雌
	SM swan	ハクチョウ
	S tercel	falcon の雄
6	S jay	カケス
	S popinjay	オウム
	sparrow-hawk	ハイタカ(雌)、コノリ(雄)
5	S capon	去勢したオンドリ
	M heron	アオサギ
	SM kite	トビ
4	SM duck	アヒル
	SM peacock	クジャク
	SM raven	ワタリガラス
	S throstle	thrush ツグミ
3	chalaundre	lark のこと
	M drake	雄のアヒル
	fieldfare	thrush のこと
	S finch	フィンチ、アトリ科の鳥
	S quail	ウズラ
	SM sparrow	スズメ
	SM swallow	ツバメ
2	S chough	ベニハシガラス
	goshawk	オオタカ
	mavis	thrush のこと
	merlin	小型のハヤブサ
	SM partridge	ヤマウズラ、イワシャコ

	tidif	小鳥	
	SM vulture	ハゲワシ	
	wodewale	woodpecker キツツキ	
1	alp	bullfinch ウン	
	archangel	鳥名、同定未解決	
	bittern	ゴイサギ	
	S brood	鳥の雛(一抱え)	
	S buzzard	ノスリ	
	SM chick	ヒヨコ、ヒナ	
	SM chicken	chick より大きいヒヨコ、ヒナ	
	columbine	dove のこと	
	culver, colver	dove のこと	
	S cormorant	ウ	
	M crane	ツル	
	S dame	雌の親鳥	
	M goldfinch	ヨーロッパゴシキヒワ	
	heysugge	hedge sparrow ヨーロッパカヤクグリ	
	S lapwing	タゲリ	
	peregrine (faucon)	ハヤブサ	
	SM pheasant	キジ	
	SM rook	ミヤマガラス	
	S ruddock	robin redbreast ヨーロッパコマドリ	
	stare	starling ムクドリ	
	SM stork	コウノトリ	
	terin	siskin マヒワ	
	wariangle	shrike, butcher-bird モズ	

以上 Chaucer が言及している鳥類の  
異なる名の総数 67  
延べ言及回数 350

### 3.3. 爬虫類

19 回	SM serpent	ヘビ、特に大きな有毒のヘビ
4	(S) naddre	adder アダ、ヨーロッパマムシ、ヨーロッパクサリヘビ
1	S snake	ヘビ
	wivere	snake のこと

以上 Chaucer が言及している爬虫類の  
異なる名の総数 4  
延べ言及回数 25

### 3.4. 両生類

1 回	SM frog	カエル
	quakke	frog のこと
	SM toad	ヒキガエル

以上 Chaucer が言及している両生類の  
異なる名の総数 3

延べ言及回数 3

### 3.5. 魚類・貝類

5 回	S slug	ナメクジ
3	SM eel	ウナギ
	SM oyster	カキ
	S pike	カワカマス
	(M) shellfish	貝
2	S luce	カワカマス
	S mussel	ムラサキガイ
1	bream	ブリーム
	echin	sea urchin ウニ
	(S) houndfish	dogfish 小型のサメ
	lamprey	ヤツメウナギ
	pickerel	pike の若いもの
	SM salmon	サケ

以上 Chaucer が言及している魚類・貝類の  
異なる名の総数 13  
延べ言及回数 27

### 3.6. 昆虫類

15 回	SM fly	ハエなど飛ぶ昆虫
11	SM bee	ミツバチ
5	SM hive	ミツバチの巣、ミツバチの群れ
3	SM butterfly	チョウ
	S gnat	血を吸う小さな双翅類の昆虫、ヌカカ、ブユなど
	S moth	ガ
1	SM flee	flea ノミ
	S pismire	アリ
	S wasp	スズメバチ、ジガバチ

以上 Chaucer が言及している昆虫類の  
異なる名の総数 9  
延べ言及回数 43

### 3.7. 架空動物

頭文字をすべて小文字に統一してある。

11 回	SM dragon	竜、ドラゴン
4	S cerberus	ケルベロス
	S mermaid	人魚
	S minotaur	ミノタウロス
2	S centauros	centaur ケンタウロス
	S harpy	ハルピュイア、ハーピー
	S hydra	ヒドラ、ヒュドラ
	python	ピュトン
1	S basilicok	basilisk バジリスク
	S griffin	グリフィン
	S phoenix	フェニックス、不死鳥
	S siren	セイレーン

以上 Chaucer が言及している架空動物の

異なる名の総数	12
延べ言及回数	35

### 3.8. その他の動物

20回	SM worm	ヘビ、アオムシ、ミミズなど 指す範囲が広い
5	S scorpion	サソリ
4	S vermin	害獣、害鳥
3	SM coral	サンゴ
	loppe	spider クモ
1	S mite	ダニ
	M shrimp	子エビ、シュリンプ

以上 Chaucer が言及しているその他の動物の

異なる名の総数	7
延べ言及回数	37

Chaucer が言及している動物全体についてまとめると

異なる動物名の総数	195
動物名の延べ言及回数	1178

## 4. Chaucer の言及している動植物の数値的に見た傾向

### 4.1. 動植物への言及の比率

Chaucer の動植物への言及の仕方について数字的な面から傾向を検討してみる。今までの数字をもう一度まとめると以下の通りである。

Chaucer の全作品中において言及されている

異なる植物名の総数	140
〃 合計言及回数(のべ)	569
異なる動物名の総数	195
〃 合計言及回数(のべ)	1178

名の種類、総言及回数とも動物のほうが多く、それぞれ植物の 1.39 倍と 2.07 倍である。これを Shakespeare と英国の伝承童謡<sup>7)</sup> (以下 Mother Goose と呼ぶ) についての数字と比較してみる。動植物拾い出しの基準を本稿の基準にそろえて整理すると次の通りである。<sup>8)</sup>

Shakespeare の全作品中において言及されている

異なる植物名の総数	220
〃 合計言及回数(のべ)	1079
異なる動物名の総数	353
〃 合計言及回数(のべ)	3809

Mother Goose の唄の中において言及されている

異なる植物名の総数	90
〃 合計言及回数(のべ)	476
異なる動物名の総数	191
〃 合計言及回数(のべ)	1485

Shakespeare は動物名の種類数が植物名の 1.60 倍、合計言及回数が 3.53 倍である。Mother Goose に関しては、それぞれ 2.12 倍、3.12 倍である。Chaucer は動物への

言及の多さが Shakespeare と Mother Goose ほどではないことになるが、しかし種類においても言及回数においても動物のほうが植物より多く、全体として動物への言及が多いという傾向が両者と共通している。

Chaucer に関する数値はいずれも Shakespeare より小さいが、これによりただちに Chaucer の方が作品中で動植物に言及する相対的頻度が低いと断定することはできない。そうするには Chaucer のテキストの分量を知る必要があるが、残念ながら *Concordance* にはそのことが記していないようだ。しかし Chaucer の方が語彙索引の対象になっているテキストの分量が Shakespeare より少ないのは確かなようである。Shakespeare の作品を通読するとき、日本人の目には全体として動植物への言及が決して多いとは感じられない。また Mother Goose も、動物はともかく、植物が多いとは感じない。Chaucer についても主観的印象は同じである。むしろ Shakespeare より少なめかと感じられる。植物 140 種、言及回数 569、動物 195 種、言及回数 1178 というのは主観的には決して多いという感じをあたえる数字ではない。

### 4.2. Shakespeare と Mother Goose に見られる動植物の種類との比較

言及されている動植物の種類と種類別の頻度に目を転ずると、リストの見出しに付けておいた<sup>S</sup>と<sup>M</sup>の印を見れば明らかのように、Chaucer の動植物の相当多くの部分が Shakespeare 並びに Mother Goose と共通している。また植物も動物も頻度の高いところは特に一致度が高い。これはすなわち、言及されている動植物の種類が三者で似た傾向を示すということを意味する。

Chaucer の 140 の植物のうち 66% にあたる 93 種が Shakespeare によっても言及されている。動物については Chaucer の 195 の動物名のうちの 74% が Shakespeare の言及している動物名と一致する。Chaucer と Mother Goose との一致度はこれより低く、Chaucer の植物の 36%、動物の 44% が Mother Goose と一致している。この数値は Shakespeare との数値ほど高くはないが、頻度の高いほうの一致度が非常に高いということに注意しておくべきであろう。なお Mother Goose の 90 種の植物名のうち 78% にあたる 70 種が Shakespeare の作品にも登場する。また Mother Goose の動物の 66% ほどが Shakespeare と一致している。ただし Mother Goose の動物名は童謡という性格上、幼児語(cattie, kitty, poussie, naggie 等)が多く一致度を下げているので、割り引いて考えなければならない。年代の近いもの同士、すなわち Chaucer と Shakespeare、Shakespeare と Mother Goose は一致度が高い。Shakespeare は前と後ろのどちらにも近いという橋渡的な位置にあることになる。

### 4.3. Shakespeare 及び Mother Goose との種類別頻度の比較

頻度の上位のものは三者の間で単に動植物の種類が一

致するだけでなく、相対的頻度の一致も示す傾向がある。たとえば Chaucer で頻度の高いものは Shakespeare でも Mother Goose でも頻度が高い傾向を示す。したがって Chaucer で上位を占めているものは Shakespeare や Mother Goose にも同じものが見られるだけでなく、そこでも頻度が高いことが多い。<sup>9)</sup> ジャンルが近いこともあり、Chaucer と Shakespeare が一番よく一致している。Chaucer の植物の上位のもの Shakespeare における頻度をあげれば次の通りである。

rose 103, corn 37, grass 29, laurel 4, oak 37, lily 27,  
daisy 6, thorn 25, bean 2, apple 14, leek 18,  
wheat 11

laurel と daisy と bean の一致度が低いが、これらの頻度が高いということが Chaucer の特徴である。ことに daisy は Chaucer の好きな花とされており、そのことが

表れているとみなすことができる。

動物についても、哺乳類に関して Chaucer において上位のものが Shakespeare でどの程度の頻度になるのか確認しておくこと次の通りである。

horse 363, lion 145, hound 45, catel 5, boar 42, steed 36,  
wolf 64, bull 53, fox 41, hart 11, sheep 63, ape 47, lamb  
57, bear 69, coursner 11, ass 102, mouse 26, ox 24, cat 44  
動物の種類だけでなく相対的頻度も総じて一致している様子がみとれる。

#### 4.4. 動物の分類別頻度の比較

動物については哺乳類、鳥類などに分類したとき、おのおの類の種類と言及頻度にも Chaucer, Shakespeare, Mother Goose の三者の間に類似の傾向がみられる。その状況を示すと次の通りである。

表 1. Chaucer, Shakespeare, Mother Goose における動物の分類別頻度比較

	Chaucer		Shakespeare		Mother Goose	
	種類	のべ回数	種類	のべ回数	種類	のべ回数
哺乳類	80	658	144	2378	91	939
鳥類	67	350	93	751	64	416
爬虫類	4	25	12	131	2	2
両生類	3	3	5	40	4	46
魚類・貝類	13	27	31	96	11	25
昆虫類	9	43	30	213	13	39
架空動物	12	35	23	99	2	4
その他	7	37	15	101	4	14
合計	195	1178	353	3809	191	1485

哺乳類が種類でも言及回数でも一番多く、これに鳥類が次ぐ。他の類はこれら2つにくらべてはるかに少ない。日本の古典や童謡について調べれば多少違う傾向があらわれると思われる。

数値的にみると Chaucer の動植物への言及の仕方は Shakespeare と Mother Goose とともに全体的傾向がかなりの一貫性を示すと言及することができる。言及されている動植物の種類も相対的頻度も、また植物より動物への言及が多いということも三者の間でよく似た傾向がみとめられる。

#### 5. Chaucer の言及している動植物の顔触れの特徴

上述のように Chaucer の言及している植物の 66%、動物の 74% が Shakespeare の作品にも登場し、個々の動植物の頻度も相対的に類似しているということは、Chaucer の言及している動植物の種類的全体的特徴と Chaucer の関心の強い動植物が Shakespeare の場合と基本的に一致しているということである。また Shakespeare と Mother Goose は Chaucer と Shakespeare

の場合と同程度の一貫性であるからこれら三者はいずれも似た傾向を示していることになる。したがって Chaucer について述べることは、全般的傾向に関して言えば、Shakespeare と Mother Goose についてすでに述べたこと<sup>10)</sup>を繰り返すことになる。それでここでは手短かに記すとどめたい。一致していない部分は一致している部分とほぼ同じ傾向であると考えてよい。なお Chaucer と Mother Goose の一貫性は少し下がるが、Shakespeare は Chaucer と Mother Goose とともに高い一貫性を示している。これは一つには時代が下るにつれ、特に植物は外国産のものが入ってきたり新品種が現れたりするので、時代が離れるほど一貫性が下がり、近いほど一致しやすいからであると考えられる。

植物は全体として有用植物と言われるものが多い。つまり薬草、香辛料、果物、木の実、穀物、野菜、木材、牧草など日常生活と密着した植物である。これらは英国に自生していたり栽培されていたりするものが多いが、薬草や香辛料には外国産のものもある。概して観賞用植物への言及が少ない。Chaucer の頃はまだそういう風潮が広まる前の時代であった。海草ときのこへの言及はな

い。Rose への言及が他の植物にくらべて突出しているのは Shakespeare と同じであるが、その絶対的頻度と相対的頻度の両方において Shakespeare をしのいでいる。Rose は女性に対する形容の定番である。Rose と lily の組み合わせも好ましい女性の譬えとしてよく使われている。この組み合わせは Shakespeare そして Mother Goose へと受け継がれた。キリスト教と大陸の文学の影響が考えられる。Chaucer においても Shakespeare 及び Mother Goose と同様、日本と違い、植物の季節の指標としての役割はあまり大きくない。

動物は英国に自然生息しているもの、もしくは人が飼育しているものが大部分を占める。家畜、家禽、狩猟関係の動物への言及が特に多い。昆虫への言及はあまり多くなく、仮にあっても日本と違って観賞的態度は見られない。中に一部、英国に生息しないのに頻度の高い動物が見られる。Lion, ape, tiger などである。これは作品の舞台がギリシャなど南欧に設定されているものがあること、そしてとりわけ Chaucer が大陸すなわちフランスやイタリアの文学とギリシャ・ローマ神話に影響を受け、内容の上でも表現方法の上でもそのスタイルを取り入れていることが理由であると考えられる。当時英国に生息していた動物でも大陸の影響で出現頻度が上昇したものとみられる。ギリシャ・ローマ神話に頻繁に登場する bear, boar, cow, bull, sheep, eagle, horse などの動物はその有力候補である。頻度は高くはないが架空動物の dragon, cerberus, minotaur を含め 11 種がギリシャ・ローマ神話の登場物である。

## 6. 結語

Shakespeare にもみられるが、Chaucer はときどき動植物名を羅列することがある。*The Canterbury Tales* の *The Knight's Tale* 2921-2923 のように oak, fir, birch, asp, alder, holm, poplar, willow, elm, plane, ash, box, chastein, lind, laurel, maple, thorn, beech, hazel, yew, whippeltree と 21 種もの木を羅列してあるなど極端な例もある。フランス語からの翻訳である *The Romaunt of the Rose* に動植物の羅列がよくみられることや、この作品に Chaucer が強く影響を受けたとされることからすると、動植物名列挙の背後にはあるいは大陸の影響が読み取れるかも知れない。動物を擬人化する *The Canterbury Tales* の *The Nun's Priest's Tale* の Chanticleer の話(この話の中にも菓草を 7 つ列挙するところがある [4153-4156])。これは医者に対する一種の揶揄。)や *The Parliament of Birds* などと同様に大陸の影響が考えられる。また、当時一般にロマンチックな詩に動植物を沢山登場させる傾向があるということを Chaucer が明確に意識していたということも確かである。このことは *The Canterbury Tales* の *Sir Thopas* という騎士物語の詩が極端に動植物の登場回数が多く、当時の甘ったるい詩のパロディになっているうえに、作中人物に「This may well be rym dogerel!」[2115] と言わせてこの詩を中断させていることから明らかである。

Chaucer 以前の英国の代表的作品であり、Chaucer とは言語的にも文学的にも断絶のある *Beowulf* は、作品を流れる雰囲気重苦しく、陰鬱で、Chaucer と大いに違っているが、動植物への言及が極めて少ないという特徴もある。動植物は生き物であるから、それが沢山登場するということは、新鮮さや活気につながるが、Chaucer の作品にはまさにそれが感じられる。動植物だけがその理由でないにしても、一役買っているとは言えよう。いずれにしてもこの鋭刺さが英国のルネサンスにつながっていく。そして Shakespeare が現れる。すでに見たとおり Shakespeare は動植物への言及の仕方が種類や種類ごとの頻度において Chaucer によく似ており、量的にそれをさらに押し進めている。Shakespeare がそのことを意識していたかどうかはわからないが、彼は Chaucer 以来の伝統をよく受け継いでいる。そして伝承童謡にも同じ伝統が脈打っているようである。動植物への言及の仕方というようなことでも Chaucer は「英詩の父」である。

## 7. 謝辞

本稿の版下作成に際して神奈川工科大学一般科の万代敏夫、平野照比古両氏からコンピュータの操作その他に関して懇切丁寧な指導をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

## 註

- 1) 池田広昭による以下の諸稿を参照。「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A-11、昭和 62 年)、「マザー・グースに現れる動物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-13、平成元年)、「Shakespeare の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成 4 年)、「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成 5 年)、「Shakespeare の言及している植物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-18、平成 6 年)、「Shakespeare の言及している動物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-19、平成 7 年)
- 2) Tatlock, John S. P. and Arthur G. Kennedy. *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose*. The Carnegie Institution of Washington, 1927. Reprinted 1963 by Senjo Publishing Company, Ltd. Tokyo.
- 3) Davis, Norman; Douglas Gray; Patricia Ingham; and Anne Wallace-Hadrill. *A Chaucer Glossary*. Oxford: Oxford University Press, 1989.
- 4) Benson, Larry D. ed. *The Riverside Chaucer*



- (third edition). Oxford et al.: Oxford University Press, 1990.
- 5) 頻度順のリストは検索の面からは不便であるが、池田広昭「マザー・グースの中の植物」、同「マザー・グースに現れる動物名」、同「Shakespeare の言及している動植物名」との比較の便から頻度順を選ぶことにする。  
中期英語の綴り、動植物の登場箇所は Tatlock らの *Concordance* を参照。
- 6) ここでは Miyakawa らの *Handbook* と Opie の *Rhyme Book* に記載されている唄を範囲として<sup>M</sup>をつけている。
- 7) 註6)に示した範囲である。
- 8) 池田広昭「マザー・グースの中の植物」、同「マザー・グースに現れる動物名」、同「Shakespeare の言及している動植物名」、同「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」をもとに微調整したものである。
- 9) 註8)に示した論文を参照。
- 10) 同上。

## 参考文献

- Tatlock, John S. P. and Arthur G. Kennedy. *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose*. The Carnegie Institution of Washington, 1927. Reprinted 1963 by Senjo Publishing Company, Ltd., Tokyo.
- Davis, Norman; Douglas Gray; Patricia Ingham; and Anne Wallace-Hadrill. *A Chaucer Glossary*. Oxford: Oxford University Press, 1989.
- Benson, Larry D. ed. *The Riverside Chaucer* (third edition). Oxford et al.: Oxford University Press, 1990.
- Coghill, Nevill trans. *The Canterbury Tales*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1972.
- \_\_\_\_\_. *Troilus and Criseyde*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1971.
- Stone, Brian trans. *Love Visions*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1983.
- Morrison, Theodore ed. and trans. *The Portable Chaucer* (revised edition). Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1977.
- Ellis, Steve. *Geoffrey Chaucer (Writers and their Work)*.

- Plymouth: Northcote House Publishers Ltd, 1996.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (third edition revised and enlarged by Gregor Sarrazin). New York: Dover Publications, 1971.
- Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag: Hildesheim, 1973.
- Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A Handbook of Nursery Rhymes*. Tokyo: Kenkyusha, 1985.
- Opie, Iona and Peter. *The Oxford Nursery Rhyme Book*. Oxford et al.: Oxford University Press, 1985.
- 榊井迪夫訳『完訳カンタベリー物語』(上・中・下)(岩波文庫) 岩波書店、1995年。
- 西脇順三郎訳『カンタベリー物語』(上・下)(ちくま文庫) 筑摩書房、1993年(上)、1991年(下)。
- 加藤さだ著『英文学植物考』名古屋大学出版会、1985年。
- P・ミルワード著『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座11)大修館書店、1985年。
- 成田成寿編集『英語歳時記普及版』研究社出版、1983年。
- 安東伸介、小池 滋、出口保夫、船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』研究社、1986年。
- 金子利雄「G. Chaucer の直喩」(『日本大学人文科学研究所紀要』第三十八号、1989年)。
- 池田広昭「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A-11、昭和62年)。
- \_\_\_\_\_. 「マザー・グースに現れる動物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-13、平成元年)。
- \_\_\_\_\_. 「Shakespeare の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成4年)。
- \_\_\_\_\_. 「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成5年)。
- \_\_\_\_\_. 「Shakespeare の言及している植物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-18、平成6年)。
- \_\_\_\_\_. 「Shakespeare の言及している動物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-19、平成7年)。